

(二)

ミキ先生の涙

下垣内 和 人

年の離れた弟が、まだよちよち歩きのところ、姉は教員になる希望に燃えてミキ先生のお宅に通っていた。家業に忙しい両親に代わって姉が幼い私の面倒をみてくれたので、いつも姉に連れられて先生のお宅にお邪魔したはずであるが、その頃のことには覚えていない。

昔気質の父は姉の勉学を許さなかった。「先生のところへ裁縫を習いに行く」そういつて姉は家を出ていたそうだが、裁縫なら父になにか言われることもなく、帰りが遅くなっても叱られることはない。先生のお宅とわが家とは百メートルと離れていなかったから、暗い夜道の心配もなかった。

先生のお宅で姉は裁縫だけを習っていたのではなかった。呉市立実科女学校にお勤めであった先生は、余暇に生徒や卒業生を自宅に呼んで、教員検定試験の勉強をさせておられた。「検定の神様」と呼ばれていた先生が、試験

の勤所を集中的に教えられる。おかげで何人もの先輩・後輩が検定試験に合格した。姉もこうして教員になり、山県郡原村の小学校にも赴任した。

夏休みなどに姉が帰省するときの土産は、雑誌「幼年時代」であり、やがてそれは「小学一年生」になった。私は休みになるのを指折り数え、学校での姉の袴姿を夢に見た。このころから私の将来の志望は「学校の先生」へと固まっていた。

戦争の激化と父の死などでこの希望は、すぐには叶えられなかった。海軍航空廠工員・少年兵・大工と回り道しながら、義兄と姉の助言と援助で、念願の「学校の先生」になることができた。

その後、縁あって本学にお世話になることになった。校務で学長室に行き、用事が済むと、よく姉や義兄の思い出話になった。そのときの先生は時の経つのを忘れておいでのようであった。私の知らない姉の一面も聞かせていただいた。

その姉が先年、癌で亡くなった。葬儀にはわざわざ、呉までおいでくださった。それ以後、学長室で姉の話をする先生の声はいつも涙声になった。「教え子に先に逝かれるのは辛い……順番が違う……」とおっしゃりながら言葉が途絶え、涙があふれてきた。いつも「もう少し元気になったら、お参りさせてもらおう」とおっしゃり、命日には供物をことづけられることが何年か続いた。

先生のご健康状態はよくはならず、学長室に遅くまで明かりがついている夜がだんだんと少なくなっていた。いつも厳しい先生で、叱られてばかりいたが、こうして、先生のもう一つの顔を見せていただきながら、勤めさせていただいた。

三、学園運営の寛と厳

今、私の研究室に、先生にいただいた「寿」の一字を書いた色紙がかかっている。昨年、ご静養中にお書きになったものである。私は力強い字とばかり思っていたが、やはり、これは優しい思いがあふれた字なんだと思う。